

1年B組	B・Bツと1B 「あきってすきすき」大作戦！！	梅本 優子
------	--	-------

1 単元設定について

(1) 単元設定の理由

① 1年B組の子どもたちと『みらい』

毎日がパワー全開の1Bツ子39人。「先生。わたしたち，“秘密の森”を見つけたよ。昼休憩に連れて行ってあげる。」「畑って、草ぼうぼうやで。あんなところで野菜作れるの?」「みんな、虫いっぱいいるところ大発見!行こう。」等々、大発見、マル得情報をおみやげに教室に戻ってくる子どもたち。また、1年生ながら自分らしさを主張し、想像力豊かに表現し、意欲的に活動する子どもたちである。

このような子どもたちであるから、『みらい』の学習でも次々と自分たちで課題を見つけ、取り組もうという姿も見られる。そのため、年間あるいは学期を見通した活動を何通りか計画した上で、取り掛かりとなる活動を始めると、子どもからいくつかの活動に寄り添ってきてくれる。そして、計画した以上の学習に発展することもあった。本単元での“劇づくり”も、子どもたちからの提案で始まった。(もちろん、指導者の活動計画の一つでもあったが……)

指導者の願いと子どもたちの思いを寄り添わせながら作りあげてきた『みらい』の学習であり、今後もそうありたいと思う。

② 「B・Bツと1B “あきってすきすき” 大作戦！！

校内にいながら、四季の移ろいを感じ取れるすてきな学習環境の附属小学校。この恵まれた環境のなかで、1年を通して、自然・季節・人々との触れ合いを『みらい』の学習の中心として進めてきた子どもたち。

子どもたちと“あき”との出会いは、夏休み中に草だらけの変わり果てた姿になってしまった畑であった。2学期になって、初めて畑の様子を見に行った子どもたちの「あんなに草ぼうぼうになって、次の野菜つくれるの?」というつぶやき……。「前みたいに草取りしたらいいやん。」「そうよ。それからまた耕して、うねを作ったらいい。」と、即答する子を横目に、「でも虫いっぱいいるで。もったいないで。」と、反論する子もいた。そこで、話し合った結果、「いっばい虫探しをしてから、草抜きをして、畑を作りなおそう。」ということになった。「こちら“1Bむしむしランド”」、「みんなで作ると、こんなにおいしい野菜」の活動の始まりである。

このように、荒れ果てた畑をどうしようか?という問題から“あきってすきすき”大作戦!がスタートしたのであった。

“はる”“なつ”“あき”“ふゆ”, どの季節もそれぞれの特性を生かし、子どもに寄り添った学習材になりうる。そのなかでも、“あき”は、鳴く虫・いろいろな形をした色とりどりの木の葉・それぞれが個性豊かな木の実・寒さのなかで育つ野菜等、子どもにとって興味深い・創作意欲の湧く素材が盛りだくさんである。そして、同じ“あき”でも“初秋”から“秋真っ盛り”“晩秋”への季節の移ろいを感じ、楽しめるのも学習の幅を広げることができる要因である。

また、本単元では、子どもたちからの提案を取り上げ、「虫さんたちのオペレッタ」を一連の活動のまとめとして取り組むことにした。1年生の子どもは変身願望が強く（～になりたい）、劇も大好きである。子どもたちは9月からの活動を生かし、自分たちの思いを込め、「虫さんたちのオペレッタ」をつくりあげることができた。

（2） 単元の目標

- 秋の自然と触れ合うことを通して、秋を実感する。
- 秋の自然をふんだんに利用し、友達と協力して楽しく創り出す活動をすすめる。
- 四季の移り変わりに関心をもつとともに、自分の生活とのかかわりを知る。
- 暮らしのなかに秋の楽しさを取り入れ、自分たちの暮らしをより豊かにしようとする。

2 実践の考察

（1） “遊び” と “学び”

どんぐりを見つけると、こまややじろべえを作ったり、落ち葉を拾ってきては何かに見立てて並べたり描き足したりして、創作活動を始めるのが1年生の子どもたちである。（放っておいても子どもは遊ぶ……）このように、本来子どもがもっている活動意欲（遊ぶの大好き！）を学習の場で生かし、“遊び” から “学び” に発展させたいと願い、本単元の構成を考えた。

では、本単元での子どもたちの活動は、“学びの姿がみられる遊び”であったか、ふり返ってみる。

- 自分が見つけた秋の素材の特徴や特性を生かして、創作活動に取り組んでいた
- 活動が進むにつれ、素材から作るものを考えるだけでなく、創作活動に必要な材料を自分から選んでいた
- 一つの遊び・一人の遊びで終わるのではなく、遊びが広められ、深められ、発展されていた
- 個人差はあるが、思考の伴った遊びが見られた

子どもたちの活動の様子や書いたもの等から、上記のような意欲的な姿がみられた。これらの姿からは、個人差はあるが、それぞれの子どもたちに “学び” の姿勢はみられたと思う。しかし、もう一步踏み込んで見てみると、他者からの評価に対する子どもたちの意識はあまり高いものとはいえない。自分たちの活動の意義を知るよりも、まず子どもたちは遊ぶことが楽しく遊ぶことで自然の不思議・動植物の特性・友達とのかかわり等を学んでいることを強く感じた。

また、指導者の目指す “学ぶ姿” と子ども “真の学び” との整合性も考えていく必要がある。

（2） “遊び” と “表現”

一人一人が感じた秋を一人一人の方法で表現するという点では、十分目標は達成できたと思う。しかし、活動のなかで自分の思いや考えを十分表現できなかつたり、否定されたりして、意欲的に取り組めなかつた子どももいた。このような子どもに対する支援がやや足りなかつたように感じる。活動中の子どもの発言や友達とのやりとり、行動、表情等も “表現” の一つと捉え、そこから子どもの姿を見取することを大切にしたい。

(3) 本单元における着目児

① (11) ★児

どの教科とも理解力に優れ、意欲的に取り組める。遊びの場でも、学習の場でもリーダー的な存在である。やや自己主張が強く、周りの友達に自分の思いを押し通そうとする面もあるが責任感が強く、努力家である。みらいの学習でも、いろいろなアイデアを出し、活動を進めていける。

本单元では、『むしずかん』や『おしばアート』『どんぐりごま』を作ったり、『まつぼっくりゴルフ』を楽しんだり、いろいろな活動に興味を示していた。グループ活動ではリーダーシップをとっていた。

劇作りでも、台本係りに立候補し、あらすじを決める話し合いでは前向きな意見を出していた。また、劇の“くもおんな”役のまとめとして、せりふの割り振りや大道具作り等の進行を(14)児とともにじょうずに進めていた。劇の本番前の話し合いでは、大きな声でせりふを言っている友達や前時よりも上手に演技をしている友達をほめる発言をしていた。マイナス面だけでないみんなにやる気を出させる発言がよかった。

(11)★児には、自分の考えをしっかりとったうえで、グループや学級の友達の意見を取り上げ、まとめていけるようなリーダー的存在に成長してくれることを願い、今後も支援していきたい。

② (19) ◆児

みらいの学習が大好きで、活動がつながっていく建設的な意見を出してくれる。単元のまとめの活動としての劇作りも(19)◆児を中心に数名の子どもたちから出された。家庭で、舞台のイメージ画を描いてきたり、劇中で使う楽器を作ってきたり、指導者が提案する前に自分から活動しはじめる子どもである。自分の言動が友達を動かし、学習を進めていけることが喜びとなり、さらに意欲的に活動に取り組めるようである。普段の言動も周りをソフトな雰囲気にするため、友達からの人望も厚い。(19)◆児だけでなく、何人かの子どもたちが『自分たちの思いや考えで学習を進めていくことができる』ということを感じ取っているようであった。また、2学期当初に比べ、友達に分かりやすく話そうという姿勢も身についてきた。

学習時、周りの友達に学習意欲を持たせ、持続していける影響力をもっている存在として、今後も着目し、育てていきたい。

③ (20) ◇児

自分の思いや考えを表現したり、友達とコミュニケーションをとったりするのが苦手な面がある。

本单元の前半の活動では、『むしずかん』作りや『どんぐりごま』作り等、個人作業に集中していた。劇作りでは、迷わず大好きなかぶとむしの役になり、ナイロン袋を使って、楽しく衣装作りをしていた。大道具作りでは(19)◆児といっしょにありの食べ物を作っていた。自分のせりふは言えるが、友達との掛け合いや間合い、動き等があまり合わないため、友達から注意を受けることもある。そのため、同じかぶとむし役の友達とのグループ練習の機会を設け、支援してきた。

(20)◇児には、劇作りを通して、友達とかかわることの楽しさや大切さを感じ取るとと

もに、学級の一員としての自覚も身に付けてほしいと願い、個別指導もしてきたが、自分が楽しむだけで精一杯のようであった。周りの子どもたちは劇を成功させるため、(20)◇児を支え、励ましている姿が見られたのはうれしかった。今後も、みんなで一つのことを創り上げていく活動を取り入れ、(20)◇児が楽しみながら自分の役割りを果たし、友達からも認められるよう、指導していきたい。

④ (30) ☆児

学習活動の見直しをもてると、スムーズに取り組めるのだが、迷いがあるときは、活動が滞りがちになる。大勢の前で自己表現・自己主張するのが苦手であることも要因の一つであるといえる。

1学期は、個別指導する場面が多かった。2学期に入り、友達とのかかわり方が上手になってきたため、『友達といっしょに……』『友達を見て……』活動できるように、場作りをしたり助言したりしてきた。

本単元でも、「どんなことをしたいのか」話を聞いて、「○○ちゃんたちと似ているね。いっしょにやってみる？参考にして一人でやる？」と、できるだけ本人に選択させて、活動に取り組めるよう支援してきた。

単元の前半では、『おしばアート』に興味をもち、色別や形別に並べたり、絵画のように並べたりして楽しんでいた。劇作りでは、なかよしの友達に誘われて“もりのてんし”役になり、家庭で自主的に天使のステッキを作ってきていた。当初、劇には参加できないかもしれないと心配していたが、練習時から小さい声ではあるがせりふを言い、同じ役の子と演技することができた。自分の思いや考えを主張するのはまだ苦手ではあるが、自分の役割りを果たすことができたことで、少し自信がついたようである。おはなしノートに、「2学期一番楽しかったことがんばったことは劇です」と、書いてあった。次の活動への弾みとなることを願う。

3 今後の課題と展望

本単元の取り組みのなかでの一番の成果は、一人一人の子どもが個性を発揮し、楽しく活動できたことである。それに付随し、友達とのかかわりが広められ、深められたことも挙げられる。実際、活動中・活動後の子どもたちの姿をみると、いろいろな面で「やればできる！」という自信のようなものが窺えるようになった。“遊び”が“遊び”に終わるのではなく、“学びの姿の見える遊び”に発展していくように、学習したことを次の活動や生活の場で生かしていくように、指導者の意図を含んだ柔軟性のある単元構成作りが大切である。

そして、自己満足プラス、1年生なりに厳しい目で自己評価・相互評価できる子どもに育てるためにも、指導者による適切な評価が必要である。

4 実践研究テーマの設定

1年生の子どもたちは、前述のように“遊び”と“学習”がまだ未分化である。“遊び”のなかから学び、“学習”のなかから遊びが生まれる。(これは高学年の子どもにも当てはまる)そのような活動には幅やゆとりがある。“学びの姿の見える遊び”、“遊び心のある学び”から子どもたちが得るものはどのようなものであるか、今後実践を進めていきたい。